

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00620

研究課題名（和文）南米および日本の長崎系カトリック・コミュニティにおける宗教生活語彙の調査・研究

研究課題名（英文）A Geolinguistic Study on Religious Vocabulary of Several Settlements Founded by Nagasaki Catholics at South America and Japan

研究代表者

小川 俊輔（Ogawa, Shunsuke）

県立広島大学・地域創生学部・教授

研究者番号：70509158

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：国内外における複数のカトリック・コミュニティでの調査から、明治時代から高度経済成長期まで、長崎のカトリック信者が国内外に移住することとなった社会経済史的背景（教会所在地域の経済的困窮、太平洋ベルト地帯の都市化・工業化とそこへの人口流入、戦後のエネルギー政策の転換、炭鉱の閉山、等）及び宗教的確信に基づく南米移住（南米諸国はカトリック国であり、自由にカトリック信仰ができることを理由とする移住、等）について明らかにすることができた。そして、左の事由から国内外に多くの長崎系カトリック・コミュニティが成立し、これを背景として、各地で先祖伝来の信仰生活・宗教生活語彙が維持されてきたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦前から高度経済成長期を通じて国内外への移住を繰り返した長崎出身カトリック信者の宗教生活語彙を記述した本邦初の研究である。当該社会集団に限らず、高度経済成長期には全国各地から太平洋ベルト地帯への移住が行われたが、これに伴う言語変化については研究の蓄積がなく、本研究はその嚆矢となった。また、厳しい生活の中で日本の近代化を支えた地方出身者、南米に渡り病院も学校もない状況から現地の人々と協働しつつ理想的・模範的なコミュニティを創り上げた方々の生活語を記録する営みは供養言語学・鎮魂言語学と呼称でき、生産性や経済の原理ばかりが重視される現代社会において、人間の尊厳を守るうえで、意義あることと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Surveys were conducted in multiple Catholic communities, both in Japan and overseas. The survey results revealed the following: 1) From the Meiji period to the period of high economic growth, Nagasaki Catholics migrated both domestically and overseas due to multiple socio-economic historical factors. 2) Migration to South America was based on religious conviction. In this way, many Nagasaki Catholic communities were established both in Japan and overseas, and the vocabulary of religious life handed down from their ancestors was maintained in each region.

研究分野：日本語学、方言学、地理言語学、社会言語学

キーワード：地理言語学 都市言語学 社会言語学 宗教生活語彙 カトリック・コミュニティ 長崎・福岡・大阪 ポリビア・アルゼンチン・ブラジル 南米移住・南米移民

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 本研究の学術的背景

本研究の学術的背景には、2つの系脈がある。それは、移住と言語変容の研究、キリシタン語彙の地理言語学的研究である。については、日本国内では、日本各地からの北海道への移住と北海道方言の形成・変容について記述・考察した小野(2001)、神戸市の「西神ニュータウン」における言語接触・言語変容について記述・考察した朝日(2008)など、多くの先行研究がある。海外でも、1980年代以降のSociolinguistics(社会言語学)において、「移住と言語変容」の研究は一貫して主要なテーマであり続けてきた。しかし、あらゆる先行研究は、「複数の地域から1つの地域に集まった人々・コミュニティの言語」を対象としており、本研究のような、「1つの地域から複数の地域に集団移住した人々・コミュニティの言語」に関する研究は(管見の及ぶ限り)皆無であった。

他方、については、本科研の研究代表者が研究を蓄積してきている(小川2011:2012:2013など)、これを継承、発展、完成させるのが、本研究である。〔引用文献:省略〕

### (2) 研究課題の核心をなす学術的「問い」

研究課題の核心をなす学術的「問い」は、「集団移住後60年を経た複数の国内・国外の長崎系カトリック・コミュニティにおける宗教生活語彙は、どのように変容したか? 変容(あるいは「維持」)過程における、言語変化の普遍性と個別性は何か?」と集約できる。この問いに答えることが本研究の目的である。

## 2. 研究の目的

1(2)に記した「研究課題の核心をなす学術的「問い」」について、詳しく記すことで、本研究の目的を明確にする。「研究課題の核心をなす学術的「問い」」における「集団移住後60年を経た複数の国内・国外の長崎系カトリック・コミュニティ」とは、具体的には、ボリビア多民族国・サンフアン移住地、アルゼンチン・ラプラタ移住地、パラグアイ・フラム移住地、ブラジル・サンパウロ市、名古屋市熱田区・カトリック熱田教会、名古屋市港区・カトリック港教会、大阪府泉佐野市・カトリック泉佐野教会、福岡市城南区・カトリック茶山教会である。いずれも、1950~1970年代初頭にかけて、長崎から、カトリック信者の集団移住がなされ、コミュニティが形成された地域(または教区)である。以上の長崎系カトリック・コミュニティにおける「宗教生活語彙」を、移住者送出元である長崎教区のそれも含めて相互に比較し、言語変容(あるいは言語維持)の実態、言語変化の普遍性と個別性を明らかにする。「宗教生活語彙」とは、中世末期に日本に伝えられた「クルス」(十字架)、「コンタツ」(念珠)などの外来語、「天国」「福音」「救世主」「三位一体」などの翻訳語からなるカトリック語彙である。

## 3. 研究の方法

本科研の応募申請書(2017年10月24日提出)には、研究の方法及び計画について、以下のとおり書いた。そのまま引用する。

-----引用ここから-----

上記の小川(2011:2012:2013)の他、申請者が研究代表者を務めた科研費による研究(「九州地方方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」2008-2009、「消滅の危機に瀕する「渡来語」の緊急調査」2011-2013、「南米ボリビア・サンフアン日本人移住地における宗教生活語彙体系の調査研究」2015-2017)により、長崎地方およびボリビア多民族国・サンフアン日本人移住地におけるカトリックの宗教生活語彙については、記述が済んでいる。残るのは、南米3ヶ国、国内3地域である。本研究を4年計画で実施することとし、最初の3年は主として調査、記述に取り組み、最終年に、3年間の調査・記述の成果を踏まえ、考察を行い、国内外の学会や学術雑誌での成果発表を行う。以上の研究計画を略記すれば、以下のとおりである。

2018年度:アルゼンチン、名古屋のカトリック・コミュニティの調査、記述

2019年度:パラグアイ、大阪のカトリック・コミュニティの調査、記述

2020年度:ブラジル、福岡のカトリック・コミュニティの調査、記述

2021年度:調査結果の比較、宗教生活語彙における言語変容の普遍性と個別性を考察

ところで、宗教生活語彙を含む「生活語彙」の記述においては、調査対象地域・コミュニティに暮らす人々の「生活」あるいは「生活史」が、確実に踏まえられている必要がある。しかし、本研究が対象とする国内・国外の長崎系カトリック・コミュニティについては、先行研究が皆無であり、申請者自身が調査対象地域・コミュニティにある程度長期間滞在し、当地の宗教生活を実際に体験し、また、現地の方から宗教生活史を教えていただく必要がある。それで、各年度国内・国外各1地点、3年かけて6地点、という研究計画を立てた。

-----引用ここまで-----

以上のとおり、当初計画では、アルゼンチン・パラグアイ・ブラジルの南米3カ国、名古屋・大阪、福岡の国内3地域の長崎系カトリック・コミュニティーを訪問調査する予定だった。しかし、2019年末から全世界に広がった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、計画どおりに遂行できなかった。結果として、南米についてはCOVID-19の流行前に調査を終えたアルゼンチンとブラジルの2カ国、国内については既に関係を築いていた大阪・長崎の2地域での調査の留まってしまった。

#### 4. 研究成果

本研究課題は、当初計画では2018年度から2021年度の4年間で実施される予定であった。しかし、2019年末から全世界に広がった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、特例措置によって、2023年度まで研究期間が延長され、結果として6年間にわたる調査研究となった。しかし、計画していたパラグアイ、名古屋、福岡での調査は実施できなかった。このため、本科研の応募申請書には、「研究課題の核心をなす学術的「問い」は、「集団移住後60年を経た複数の国内・国外の長崎系カトリック・コミュニティーにおける宗教生活語彙は、どのように変容したか？ 変容（あるいは「維持」）過程における、言語変化の普遍性と個性は何か？」と集約できる。この問いに答えることが本研究の目的である。」と書いたが、この問いに明確に回答することは困難であった。誠に遺憾である。

他方、COVID-19による行動制限下でありながら、可能な限り研究の遂行に努めた結果、当初想定していなかった事象も含め、様々な研究成果が得られた。以下、順に掲げる。

##### (1) 主要な研究成果 その1 ポリビア多民族サンフアン日本人移住地におけるカトリック教会史、信仰生活史の調査研究

本研究課題の目的を抽象化して端的に表現すれば、「宗教生活語彙の記述及びその社会言語学的分析」となる。これを達成するためには、宗教生活そのものを記述する必要がある。この点について、南米ポリビア多民族国サンフアン日本人移住地におけるカトリック・コミュニティーの宗教生活に関して、<1>小川俊輔（2019）「ポリビア多民族国サンフアン移住地におけるカトリック教会の創成と発展 南米の日本人移住地における「キリシタン移住者」の信仰生活」(『県立広島大学人間文化学部紀要』14, pp.115-129) 及び<2>小川俊輔（2022）「ポリビア多民族国サンフアン移住地におけるカトリック教会の創成と発展(2) 太郎神父、次郎神父、2人の信徒の活動を中心に」(『県立広島大学地域創生学部紀要』1, pp.171-183)と題する学術論文として学界に成果を報告できた。各論文の要旨は以下のとおり。

<1>南米のポリビア多民族国に「サンフアン」という名の日本人移住地がある。1955年に創設されたこの移住地では、熱心なカトリック信仰が行われてきた。移住地創設以来、その中心を担ってきたのは、長崎出身の、ザビエル時代にカトリックに改宗した人々の子孫であった。彼らの招来に心えるかたちで、1960年には日本語を話す神父が、1961年には指導的役割を果たし得る一般信徒が移住地に到着する。こうして、市街地に煉瓦造りの教会堂が建設され、他方では、カトリックへの集団改宗が起きた。その後、移住地のカトリック教会は、国内巡礼・世界巡礼、日本人神父による司牧、カトリック高位聖職者の来訪などを経験し、移住地出身の神父・修道女を多数輩出するなど、大いに発展し、今日を迎えている。

(論文本体オープンアクセス: [https://researchmap.jp/shun451/published\\_papers/18966325](https://researchmap.jp/shun451/published_papers/18966325))

<2>本論文は、ポリビア多民族国サンフアン日本人移住地におけるカトリック教会史の叙述を目的とする。小川（2013; 2019）も同じ目的で書かれており、本論文はこれに続く3本目の研究論文である。小川（2019）は、より具体的には、サンフアン移住地におけるカトリック共同体の創設から現在にいたるまでの通史の叙述を目的としており、年代順に、特に重要と考えられる出来事、大きな役割を果たした人物の活動について記述している。本論文は、その補遺として位置づけられる。各章の概要は以下のとおり。第1章：本論文の目的、方法、構成、第2章：小川（2013; 2019）に登場する太郎神父の生誕からポリビア赴任までの経緯、第3章：太郎神父のポリビアでの活動、次郎神父のポリビア赴任の経緯とポリビアでの活動、第4章：小川（2019）で詳しく取り上げた赤島要蔵さんの生誕からポリビア入植までの経緯、サンフアン移住地およびアルゼンチン転住後の信仰生活、第5章：次郎神父の要請で移住地に入植し、教会だけでなく移住地全体の発展に貢献した中村三省さんの活動、第6章：サンフアン移住地出身のカトリック聖職者一覧、第7章：まとめ。

(論文本体オープンアクセス: [https://researchmap.jp/shun451/published\\_papers/36530854](https://researchmap.jp/shun451/published_papers/36530854))

2013年に本科研の研究代表者は「南米に移住した長崎のキリシタン家族 ポリビア多民族国サンフアン日本人移住地の事例」と題する論文を発表しており、これと<1>・<2>を合わせていわば「3部作」が完結したかたちとなる。南米の日本人移住地において潜伏キリシタンの先祖を持つ長崎出身のカトリック信者を中心に創設・発展してきたカトリック・コミュニティーの

信仰生活史の記録は、移民研究においても、教会史研究においても貴重な成果である。これを踏まえて、次の(2)に挙げる成果が得られた。なお、サンフアン日本人移住地におけるカトリック教会史については、上記「3部作」を軸に、より人物史に厚みを持たせた一般向けの図書の刊行準備を進めていることを付記しておく。

## (2) 主要な研究成果 その2 キリスト教用語の地理言語学的研究

地理言語学は、ある概念の方言形を地図上に示し、方言形の分布の様相から、同じ概念を表す語彙群の歴史(相対的・絶対的先後関係)を明らかにしようとする。その際、歴史、社会、文化などの様々な言語外の情報を参照する。「キリスト教用語の地理言語学的研究」は、本科研の研究代表者が2003年以来、ライフワークとして継続してきたものである。本科研による調査・研究の成果を反映させた研究論文として、以下の2つを公刊した。<3>「キリシタン文化と方言語彙」、<4>「キリシタン文化と方言地理学」。

<3>は小林隆編『方言の語彙 日本語を彩る地域語の世界』(シリーズ 日本語の語彙 8) 朝倉書店)に招待を受けて掲載された論文である。この論文の概要は以下のとおり

<3>中世末期から近世初期にかけて隆盛を極めた「南蛮文化」は、日本(語)に多くの「南蛮渡来語」をもたらした。「南蛮渡来語」のうち、キリシタン宗門と直接関係のない語「カステラ」<sub>カ</sub>、「ポーロ」<sub>ポ</sub>、「ジバン(襦袢)」<sub>ジ</sub>、「ラシャ」<sub>ラ</sub>、「ピロード」<sub>ピ</sub>、「カップ」<sub>カ</sub>、「タバコ」<sub>タ</sub>、「ビードロ」<sub>ビ</sub>などは、日本語体系の中に、原語に近い語音・意味のまま受け入れられ、今日に到っている。他方、キリシタン宗門と直接関係のある宗教用語(=「キリシタン語彙」)のほとんど(Companhia(会)、Superior(上長)、DOCTRINA(教義)など)は、忘れ去られた。数少ない例外がamen、Christão、padreの3語であり、その受容、変容、土着には、キリシタンの迫害、差別、潜伏、偏在などの社会的背景が影響を及ぼしている例が多く見られた。

他方、キリスト教に対する偏見・差別の薄れとともに、今日、「キリシタン語彙」は新しい価値を持ち始めている。北原白秋や芥川龍之介、遠藤周作らの「南蛮趣味文学」あるいは「切支丹物」と言われる作品群には、「キリシタン語彙」が頻用され、異国情緒を喚起し、多くの読者を惹きつけている。また、九州では、今、「ザビエル食べようか」<sub>ザ</sub>、「クルス(原語は「十字架」の意のポルトガル語cruz)食べようか」<sub>ク</sub>、「パテレン飲もうか」などの会話が、日々、交わされている。種を明かせば、「ザビエル」は大分、「クルス」は長崎県島原半島の銘菓、「パテレン」も同じ島原半島の焼酎の商品名なのである。商品名として「キリシタン語彙」が選ばれたわけである。

<4>は小林隆・大西拓一郎・篠崎晃一編『方言地理学の視界』(勉誠出版)に招待を受けて掲載された論文である。この論文の概要は以下のとおり。

<4>本論文では、長崎系カトリック用語の「旧信者」の歴史的・地理的変遷過程について分析した。紙幅の都合上「新信者」について詳しく取り上げることができなかったが、太平洋戦争の終結、第2バチカン公会議、海外移住を境にして「旧・新」が明確に分かたれるような「旧信者」「新信者」の使用が見られた。類例は多くあり、たとえば、[ア]日本人のブラジル移住における「旧移民・新移民」<sub>イ</sub>、[イ]在日定住外国人に対する「オールドカマー・ニューカマー」などが挙げられる。

他方、「旧信者」あるいは「新信者」のどちらかだけが使用されている地点も多かった。例えば、京都司教区の複数の教会から、「洗礼を受けて1年以内の信者」を「新信者」と呼んでいるとの報告があり、その中に「旧信者」が使われていない教会があった。これは、ニュートラルでないものに対して「旧」または「新」を付して名指す事例であろう。

本論文では、佐藤亮一(1977)の記述を念頭に置き、「各地におけるキリスト教の歴史についての資料」<sub>イ</sub>、具体的には、教会史、移住史などを参照しながら長崎系カトリック用語「旧信者」の歴史を考察した。「旧信者」という語の発生にはキリシタン迫害・潜伏・復活の歴史が関わっており、この語の全国伝播は長崎のカトリック信者の太平洋ベルト地帯への集団移住に由来するものであった。集団移住の背景には近世以降のキリシタン近世・迫害があった。他方、主な移住先が太平洋ベルトの工場地帯であったことについては、日本の近代化、工業化、高度経済成長などの日本近代史に言及しつつ説明すべきであったが、紙幅の都合上、これを省略した。

さて、これまでの「移住と言語」をテーマとする研究は、転封などの集団移住によって生じた「言語島」の研究、複数の地域から人々が集まった場所、例えば開拓地である北海道や国内各地のニュータウン、あるいは海外の日本人移住地等で起きた言語接触についての研究など、移住先の1地域を対象とするものばかりであった。他方、本論文の研究対象は、特定地域から全国に移住した人々の言葉であり、移住元の語が各地でどのように変化したが、あるいは変化しなかったのかを明らかにした。このような視点を持つと、たとえば、広島県安芸津町の三津杜氏の人的・技術的な全国展開と各地における酒造語彙について、また、群馬の養蚕技術と養蚕語彙の伝播についてなど、様々な未開拓の研究課題が想起される。かくのごとく「各地における当該事象の歴史についての資料を得て検討する」方言地理学には、未開拓の沃野が広がっている。

### (3) 関連する研究成果 その1 ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ

本科研による研究に関連する1つめの研究成果として、佐藤弥生・小川俊輔「ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ」(『県立広島大学人間文化学部紀要』16, pp.55-78)がある。本論文は、本科研の研究代表者のゼミ学生であった佐藤弥生の卒業論文に基づいて執筆された。南米日本人移住者の宗教生活・宗教生活語彙の記述と、ハワイ日系移民のアイデンティティの記述は相互に関連する。紙幅の都合上、本論文の要旨は省略する  
(論文本体オープンアクセス: [https://researchmap.jp/shun451/published\\_papers/31749405](https://researchmap.jp/shun451/published_papers/31749405))

### (4) 関連する研究成果 その2 カトリック教会における「神の声」

本科研による研究に関連する2つめの研究成果として、<5>小川俊輔(2023)「人は神の声をどのように聞くのか カトリック教会の場合」(『社会言語科学』26(1), pp.78-93)がある。本論文は社会言語科学会の査読付き機関誌『社会言語科学』の編集委員会からの招待を受けて掲載された。カトリック信者の宗教生活語彙の中心にあるのは『聖書』の言葉であり、それはすなわち神の言葉である。カトリック信者の日常生活や諸儀式の中で、「神の声」はどのように聞こえてくるのか。この問いについて、文化人類学及び社会言語科学の方法で迫った。論文の概要は以下のとおり。

<5>現代において、人は神の声を聞くことができるのか。できるとすれば、それはどのように可能なのか。本論文はこの問いに答えようとする。主な考察の対象は日本のカトリック教会である。旧約聖書や現代小説には、神が人間に語りかける場面、神と人間とが直接ことばを交わす場面が繰り返し描かれてきた。しかし、聖書、教会文書、カトリック司祭の著述などによれば、現代を生きる私たちは神の声を物理的な音声として聞くことはできない。他方、聖書は聖霊の働きによって書かれたものであり、それがミサ聖祭において朗読されるとき、それは現存する神が直接会衆に語りかけているのだ、と教会は考える。そして、信徒が聖書、特に福音書を理解できるよう、教会そして司祭は様々な努力を払っている。その具体的な方法の1つが、司祭による福音書の解説、すなわち「説教」である。ミサにおける「説教」は司祭だけが行うことができると定められている。「説教」の他、「聖変化」や「ゆるしの秘跡」など、司祭は教会から様々な権能を与えられている。それらはいずれも神と人間(一般信徒)のコミュニケーションを媒介する役割を担っている。司祭はそのことにより招来する権威性に自覚的である必要がある。

(論文本体オープンアクセス: [https://researchmap.jp/shun451/published\\_papers/43911505](https://researchmap.jp/shun451/published_papers/43911505))

### (5) 関連する研究成果 その3 日本語における男性名と女性名の史的変遷

本科研による研究に関連する3つめの研究成果として、<6>小川俊輔・森楓花(2024)「日本語における男性名と女性名の史的変遷 2拍名を中心に」(『県立広島大学地域創生学部紀要』3, pp.165-181)がある。一見、本科研による研究との関連が見えにくいと思われるが、こういう次第である。ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地における宗教生活・宗教生活語彙の記述を進める中で、彼ら(日本人移住者)が子や孫の命名(first name)をする際に、スペイン語のルール(語末母音がoならば男性名、aならば女性名)への適応や、クリスチャンネームをfirst nameとして使用するなど、南米の日本人移住地ならではの事象が観察された。2022年度からは、当該事象の調査・研究を目的とする科研費による新たな研究「南米ボリビアの日本人移住地における子どもの名づけに関する社会言語学的研究」(課題番号22K00574)を開始したところである。この新規課題に取り組むに当たり、南米移住地における命名行為と日本国内におけるそれとを比較する必要がある。しかし、日本における命名の研究はデータの収集と公開が未整備である。以上の研究状況に照らして執筆されたのが、<7>の論文である。

なお、この論文は、本科研の研究代表者のゼミ学生であった森楓花の卒業論文に基づいて執筆された。本論文の要旨は以下のとおりである。

<6>本論文では、2000・2001年(平成12・13年)生まれの人名(first name)について新たに調査をおこなってデータベースを作成し、1980年(昭和55年)頃生まれの人名について考察した田籠(2005)と比較し、次のことを明らかにした。男性名では、1980年(昭和55年)頃生まれは4拍が最多、2000・2001年(平成12・13年)生まれは3拍が最多。つまり、最も一般的な男性名の拍数は変化した。女性の2拍名は、1980年(昭和55年)頃生まれは21.4%、2000・2001年(平成12・13年)生まれは29.0%と増加した。2拍名の2拍目の音(語末音)には男女差がある。男女とも1980年(昭和55年)頃に比べ、2000・2001年(平成12・13年)の2拍名の語末音はその種類が増えた。しかし、その音がア・エである場合、両世代とも、それは女性名である。

また、インターネット上に公開されている2つの名前ランキングから、令和時代における命名の傾向を考察し、次のことを推定した。1980年(昭和55年)頃以降、2拍の男性名がその人気を高め続けている。1960年(昭和35年)以降の2拍の女性名の急激な増加傾向は、平成・令和の時代を通じて継続、あるいは高次安定している。

他方、2022年(令和4年)の名前ランキングには、2拍名の2拍目の音(語末音)がアである男性名が登場する。新傾向の名である。

(論文本体オープンアクセス: [https://researchmap.jp/shun451/published\\_papers/45746692](https://researchmap.jp/shun451/published_papers/45746692))

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小川 俊輔・森 楓花	4. 巻 3
2. 論文標題 日本語における男性名と女性名の史的変遷 2拍名を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.165-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 26
2. 論文標題 人は神の声をどのように聞くのか カトリック教会の場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 pp.78-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.26.1_78	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 -
2. 論文標題 キリシタン文化と方言地理学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小林隆・大西拓一郎・篠崎晃一編『方言地理学の視界』所収	6. 最初と最後の頁 pp.235-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 2
2. 論文標題 4周年記念講演会について（「南米に移住した五島キリシタンの活躍：1955年創設ポリビア・サンファン移住地を中心に」）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 久賀島潜伏キリシタン資料館 資料館だより	6. 最初と最後の頁 pp.1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 346
2. 論文標題 ポリビアの長崎村	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ケース研究	6. 最初と最後の頁 pp.181-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 1
2. 論文標題 ポリビア多民族国サンファン移住地におけるカトリック教会の創成と発展(2) 太郎神父、次郎神父、2人の信徒の活動を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.171-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 46
2. 論文標題 高度経済成長と方言分布 太平洋ベルト, 集団就職, キリシタン語彙	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会言語科学会 第46回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 pp.280-283
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 弥生, 小川 俊輔	4. 巻 16
2. 論文標題 ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 県立広島大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.55-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 -
2. 論文標題 キリシタン文化と方言語彙	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小林隆編『方言の語彙 日本語を彩る地域語の世界』（シリーズ 日本語の語彙 8）所収	6. 最初と最後の頁 pp.29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 14
2. 論文標題 ポリビア多民族国サンファン移住地におけるカトリック教会の創成と発展 南米の日本人移住地における「キリシタン移住者」の信仰生活	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 県立広島大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.115-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 -
2. 論文標題 外来語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』所収	6. 最初と最後の頁 pp.551-555
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 -
2. 論文標題 佐賀県	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 真田真治・友定賢治編『県別 方言感覚表現辞典』所収	6. 最初と最後の頁 pp.84-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 書評 大西拓一郎(著)『ことばの地理学 方言はなぜそこにあるのか』大修館書店, 2016	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 pp.384-387
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 俊輔	4. 巻 -
2. 論文標題 西日本(「方言誌」の項に含まれる)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学会編『日本語学大辞典』所収	6. 最初と最後の頁 pp.879-880
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 2件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 OGAWA, Shunsuke
2. 発表標題 A Sociolinguistic Analysis on Naming of Children in Japanese settlement in Bolivia, South America
3. 学会等名 10th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川俊輔
2. 発表標題 南米に移住した五島キリシタンの活躍: 1955年創設ボリビア・サンフアン移住地を中心に
3. 学会等名 久賀島潜伏キリシタン資料館4周年記念行事(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川俊輔
2. 発表標題 高度経済成長と方言分布 太平洋ベルト, 集団就職, キリシタン語彙
3. 学会等名 社会言語科学会 第46回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川俊輔
2. 発表標題 長崎系カトリック用語の全国伝播 守り継がれる「ゼンチョ」, 移りゆく「旧信者」
3. 学会等名 日本方言研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OGAWA, Shunsuke
2. 発表標題 Why and how does religious term become common word? :A case study of Christian words in Japan
3. 学会等名 The 17th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川 俊輔
2. 発表標題 キリシタン語彙の受容と変容 地理言語学の一実践
3. 学会等名 立命館大学大学院言語教育情報研究科ゲストスピーチ (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 OGAWA, Shunsuke
2. 発表標題 Historical and Geographical variation of Christian vocabulary in Japan and South America
3. 学会等名 9th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 木部暢子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 173
3. 書名 明解方言学辞典	

1. 著者名 (共編者) 出雲 俊江, 小川 俊輔, 木本 一成, 重野 裕美, 溝淵 園子, 武藤 清吾, 本岡 亜沙子, 山田 実樹 (著者) 小川 俊輔を含む総勢178名	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 664
3. 書名 『赤い鳥事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

県立広島大学日本語学研究室 <a href="https://www.pu-hiroshima.ac.jp/p/s-ogawa/">https://www.pu-hiroshima.ac.jp/p/s-ogawa/</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------